

Ethnic家族分析のための理論枠組みの検討

竹 田 美 知

近年、日本においても海外から新しく移住してきた外国人の姿が大都市周辺で数多く見受けられるようになってきた。単身で経済的成功を目標として来日し短期に滞在し帰国する形から、家族で来日し日本の地域社会で生活する形までそのライフスタイルは多様である。

本論文はこのようなEthnic家族の生活を分析するための理論枠組みを検討するのが目的である。最初にこのようなEthnic家族に関しての日本における研究を紹介しその理論的枠組みを抽出したい。第二にEthnic家族研究ですでに大きな成果を持っているアメリカのソーシャルワーク研究の成果を紹介する。最後にこれらの検討から得た日本におけるEthnic家族の生活体験分析のための理論的枠組みを提案したい。

<日本におけるEthnic家族研究>

外国人労働者としての労働問題としての研究は数多いが、家族の生活問題としてEthnic家族を正面から扱ったものは少ない。日本におけるEthnic家族の研究として家族全体を対象として社会的に扱ったものとして、1994年、奥田道大・広田康夫・田嶋淳子らの「外国人居住者と日本の地域社会」はその数少ない業績の一つである。

家族全体を対象とするのではなく、家族の中の個人（主に子ども）を対象とした論文は比較的多い。異文化体験と子どものアイデンティティ確立を問題関心としたものは「海外帰国子女」に関する研究として帰国子女受け入れ機関を中心に実施されたものが多い。1988年、カニングハム・久子の「海外子女教育事情」、1991年、箕浦康子による「子供の異文化体験」、1993年、岡田光世「ニューヨーク日本人教育事情」などはその代表的な報告である。このように海外体験を経た日本の子どもの問題は近年「帰国子女問題」としてクローズアップされてきたにもかかわらず、日本において海外体験を積みつつある子どもたちを対象としたものは少ない。日本が公的に海外移民、定住外国人を数多く受け入れていない事実や、一時的に滞在する外国人子弟がインターナショナルスクールに通い学校におい

での文化的不適応といった問題が表面化しなかったことも研究業績が少ないことに影響していると思われる。その数少ない研究の一つが前出の「外国人居住者と日本の地域社会」に収録されている「外国人児童、生徒のアイデンティティの行方」である。

<研究対象の単位について>

これら従来の研究から、異文化体験を分析する単位として、家族を対象とするのか、個人を対象とするのかという研究対象の設定の仕方が問題になってくる。上野千鶴子は1994年、「近代家族の成立と終焉」の中で、チョン・ヨンへの論文を引用しながらこの問題に触れている。

「家族は、性差と年齢差を含む集団である。適応というのは結局、個人個人の内面的プロセスであって、そういうプロセスがたまたま家族という単位で集まってグループダイナミックスを起こすということはあり得るが、家族そのものがまとまりのある上位単位となって父親が適応すれば家族が丸ごと適応課題を果たすということにはならない。」とチョンは指摘する。

すなわち、親の適応は親の適応であって子の適応を必ずしも保証しないし夫の適応は妻の適応を保証しない。その逆も真である。それは個々のファミリーメンバー個別の課題であって、相互の間のズレやゆがみが新しいファミリーダイナミックスを引き起こす。それが家族の結束を強化する方向に向かう場合もあれば、潜在的な軋轢を拡大し、様々な危機をもたらす場合もある。『大草原の小さな家』のように家族を背後にかばった父親が自然の脅威に立ち向かうという神話的イメージは、ここでは崩壊する。家族はけっして上位のシェルターとして個人を保護し、適応の媒介項になるという性質のものでなく適応の単位はあくまで個人なのである。だとすれば性差と年齢差が異文化適応のプロセスで果たす変数としての意味は、もっと積極的に問われなければならない。また、メンバー相互の間に適応ギャップの大きいマルチカルチュラルファミリーのダイナミックスについてもその内部にもっと踏み込んだ研究が必要であろう。」

上野によれば、異文化適応に関する戦略的な研究対象として個人を分析の単位に据える方が有効ということになる。しかしここで注意したいことがある。チョンの指摘のように「父親が適応すれば家族が丸ごと適応課題を果たすということにはならない。」というように、異文化適応における個人と家族との関係を「ゼロサム」モデルで論じてよいものだろうかという疑問である。異文化適応は決して適応—不適応という二律背反で語られるべきものではないと思う。家族が移住してから生活体験を積む年月の中で、個人個人の適応にスピードの差があることは明白である。その生活史の一点を輪切りして、適応・不適応というラベリングをすることは、分析手法として好ましくない。

上野が言うように生活環境の変化は個人の単位の生活に顕在化した影響を与えるだろう。しかし家族が適応の媒介項になるかどうかについて、「父親がシェルターとして生活環境の激変に対する機能しない。」という一例をもって結論を導くのは性急である。例えば、箕浦康子は、調査結果から「母がアメリカ人と接触する頻度」、そして「母の英語使用能力」などが「子どものアメリカ人との交友頻度」に影響を与えると述べている。さらにカニングハム・久子はその臨床例の中で「父親の家庭での態度」と「アメリカにおける学習障害児の適応度」との関係を指摘している。また広田は「家族の絆」が「家族の移民物語の形成」という形を通して子どもたちの「適応」の過程に重要な役割を果たしていると述べている。家族の中での個人と個人の相互作用がそして家族という集団が、個人と生活環境での相互作用に影響を与えていることをこれらの知見が示している。

箕浦康子は、「養育者たる親自身が母国の文化に対して、またアメリカの文化に対して、まちまちの志向を持ち、国際派といわれる親からアメリカにいながらも日本を向いて暮らしている親まで、子どもの社会化環境として家庭内の雰囲気のアメリカ度、日本度はかなり違い、それが子どものアメリカ化を促進あるいは抑制することが考えられる。」と述べている。子どもの社会環境としての「家庭内の雰囲気」つまり家庭内に内在化された規範やシンボルが、子どものアイデンティティ形成に影響力を持つわけだ。ゆえに家族集団は分析対象として有効な意味を持っているのである。

<適応の概念について>

これまでのEthnic家族に関する研究は、「適応」という概念を中心として展開されている。例えば岡田光世は、「ニューヨークの日本人教育者は、現地校で不適応を起こすのは男子に多いと口をそろえる。男子の方が勉強に対する親の期待が大きい分、プレッシャーも大きい。日本人の親はどちらかという、生活面では男子の方を甘やかして育てるが、女子の方は柔軟性がある。」と不適応の原因を探る。また箕浦の調査の中でもアメリカ文化同化過程に寄与していると思われる要因を独立変数と見て同化進度を従属変数として設計している。また上野も同様に「異文化適応には、行きの異文化適応と帰りの自文化再適応の二つの側面がある。ここで問題になるのが、文化のハイアラキーである。同化主義は優位文化に対してしか働かない。」と同化主義が異文化適応に原理として働くことを前提としている。しかしその一方で広田は彼の調査の中から必ずしも同化に向かわない「適応形態」に着目している。広田によると「彼らは、言語や習慣に関して見事に理解を示し、適応する。こうした適応形態の「状況適応的形態」に関する理解なしには彼ら独特のアイデンティティ形成の問題は理解できない。そしてこの「状況適応的形態」、特定の国家への所属の狭間で揺れるというよりは、自らのEthnicityへの帰属を通して主体的に状況に適応していく彼ら

の性格をもたらしているという事実にも我々は注目しておく必要性がある。」

要するに、岡田、箕浦、上野らの「適応」の概念は、優位文化と見なされるホストの国の文化に個人も家族も直線的に同化していくという「同化の理論」が前提にある。しかし広田の場合はこの「同化」に向かわない「適応」の形をケーススタディーから見だし、「同化志向」を必ずしも前提としない適応形態に着目している。

＜アメリカのソーシャルワークの観点から「適応一同化」理論検討＞

すでにEthnic家族研究では、先達であるアメリカでは、多様な生活問題に直面した家族と援助するための試みが、ソーシャルワークを通じて行われている。Ethnic集団の生活問題を分析するとき、カウンセラーはEthnicityをどのように把握すべきだろうか。Comas-Piazによると、「Ethnic文化的要求に対してカウンセラーはカウンセラー自身価値判断を下さない。」ことを提案している。Malgady,Rogler,Costantinoによると「カウンセラー自身がEthnic家族に持っているホスト国の文化に同化させなければならないという思いこみこそ排除すべきだ。」と注意を促している。

彼らはEthnicityに注意を払うということは、カウンセラーがEthnic文化を理解し、Ethnic文化とホスト国の文化が対等な立場で十分交流できる生活環境を用意することが必要であることを主張している。つまり単線的な同化ではなく、内在されたEthnic文化と、ホスト間の文化間に 対等な地位を確立してその間の相互作用を維持してこそ、Ethnic家族の問題解決に役に立つのである。Ethnicな文化を打ち負かしたり、Ethnicな人々をホストの国の文化に同化させることはその前提には、ホストの国の文化はEthnic文化より優れているという価値判断がある。それと同時に移住者は永久にホスト国で生活しホスト国のメンバーになるという仮定もある。しかしながらホスト国の文化に文化変容されないEthnicマイノリティーの人々は存在する。彼らは経済機会を得るために祖国を離れ、新しいホスト国に永久に住み着くよりも素早く経済的利益を得るために移住する人達である。「帰国子女」研究のほとんどの研究対象はこのタイプのEthnic家族である。それなのに研究者は適応の尺度として新しい国に永久に移住する人々に望まれる単一的同化を使ってしまっている。そればかりか永久に移住するEthnic家族であっても、ホスト国の文化に同化することを帰結とするのはソーシャルワークでは問題解決にはならない。

Rogler,Malgady,Costantino,Blumenthalは、文化変容の過程を次のように説明している。「文化変容の過程は、多様な構成要素の影響を受ける。Ethnic文化、ホスト国の文化そして両方の文化から新しく生まれた文化の影響を受ける。」FandettiとGoldmeierもEthnicグループが新しい社会経済的環境と相互作用するとき、文化的表出に関して変化のパターンがあり、そしてまた家族の文化変容に関しても多様なパターンがあることを報告している。こ

のように文化変容が多様性を持つ時、Ethnicityは重要な要因であることは確かである。しかしEthnicityはEthnicグループの問題を解決するたった1つの要因ではない。Sueによると、「Ethnicグループにとって、Ethnicityは問題解決の重要な一つのキーと考えられるが、援助するグループを理解する上で必要な認知地図上の一要因にしかすぎない。」GelfandとFandettiによると「Ethnicityは他の社会要因との関連において評価した方がよい。システムティックな要因の配置を施した理論枠組みから、Ethnic家族の問題解決の糸口が見つかる。」と提案している。

<日本におけるEthnic家族分析に向けて>

以上のようなアメリカのソーシャルワークにおけるEthnicity研究をふまえて、我々はどうのような前提のもとに出発したらよいのだろうか。

同化理論に対してはソーシャルワークの立場以外にもアメリカの新しい都市社会学の立場からも疑問がでてくる。広田によれば「もともとアメリカの都市社会学に置いては、適応過程に生じる社会的葛藤の諸問題を都市問題として提示することでこの学問分野が発見された。従ってゴールドによればEthnicityの存在自体が都市問題を生み出す根元と見られることになった。むろんここには移民は支配的文化に同化するのが自然の成り行きでありそれが移民にとって最終的な目標であるという信念が前提としてあるのだが、最近でははむしろこうした同化志向を前提としない移民適応類型が注目されだしている。

ソーシャルワークの研究成果とこの新しい都市社会学の成果から日本におけるEthnic家族分析に向けて次のように結論づけることができる。

Ethnic家族の生活は変化している。しかしこの変化の方向はホスト国の文化に吸い込まれるような同化の方向でのみ起こっているわけではない。むしろEthnic家族が住むことによってホスト国の文化自体も多くのレベルで変容している。例えばマクロなレベルでは、地域社会の施設や教育もEthnic文化と相互に交流することによって変化する。メゾレベルにおいては、地域社会における住宅に対する考え方も、その地域にすむEthnic家族の構造の影響を受けるし、地域の学校や家庭もEthnic文化独自のしつけの影響を受けるであろう。またミクロのレベルにおいては、ホスト国でマジョリティーを占める個人もEthnic文化の影響を受けて例えば食生活に変化が起こったりそれを機会に他の文化を理解するチャンスを持つわけである。私はEthnic家族の分析はこのような双方向の変化を前提として進められるべきであると提案したい。だからこそEthnicityは、生活分析を進める場合重要な独立変数としての意味を持つ。しかしそれと同時に他の独立変数（例えば彼らを取り巻く生活環境の変化、家族員それぞれの今回の滞在の意味づけ、地域社会のメンバーのEthnic家族に対する考え方など）も大きな意味を持つ変数である。そしてこれらの独立変数の影響か

ら考えられる従属変数としての生活の変化は、同化という単一のパターンではなく、ホスト社会の文化変容までさせる力を持ったパターンまで存在するような多様なパターンであると想定されなければならない。

参考文献

- 奥田道広・広田康夫・田嶋淳子(1994)「外国人居住者と日本の地域社会」明石書店
- カニグハム・久子(1988)「海外子女教育事情」新潮選書 新潮社
- 箕浦康子(1991)「子供の異文化体験」思索社
- 岡田光世(1993)「ニューヨーク日本人教育事情」岩波新書 岩波書店
- 上野千鶴子(1994)「近代家族の成立と終焉」岩波書店
- Comas-Piaz,L(1981). Puerto Rican espiritismo and psychotherapy. 51(4) 636-645
- Malgady,R.G.,Rogler,L.H.,& Costatino, G.(1987).
Ethnocultural and linguistic bias in mental health evaluation of Hispanics.
American Psychologist,42 (3),228-234.
- Rogler,L.H.,Malgady,R.RG.,Costatino,G.,& Blumenthal,R.(1987)
What do culturally sensitive mental health services mean? American
Psychologist,42(6),565-570
- Fandetti,D.,& Goldmeier, J.(1988)
Social workers as culture mediator in health care settings. Health and Social
Work, Summer, 171-179
- Sue,S.(1988).
Psychotherapeutic services for ethnic minorities:
Two decades of research findings.
American Psychologist,43(4),301-308
- Sue,S.,& Zane, N.(1987)
The role of cultural techniques in psychotherapy.
American Psychologist,42(1),37-45.
- Gerfand, D.E., & Fandetti, D.V.(1986).
The emergent nature of ethnicity:
Dilemmas in assessment.
Social Casework,67(11),542-550